# あこ拍ものうた 上

特別
へ13
4178
1

特
へ13
4178

アヤメ
ようこう

58 2038

のこ物がたり序

平為春

此ごろの物がたりは手ごゝろ〳〵へ為ごとに事ありて
人毎ならぬ道よいでゝ野へ山邊とゆくりなくたゞ
里ゆくまもろはこゝまれ月はそでめすれど夕風そゞ
くこゝかきくらし袖をぬらしまはりぬ里はあり山里よ美
のまゝをむさぼひ歌をあけがたよきすてんとせよ
ゆきまがをゝごと物ゝいてゝ事ふおとにやまをぬだ
よ指海ハ物ゝのきゝ事ひあうよやいひつ身を事に
り宿のあるゞ此ゆかりとて老體ひゝとへ人ありしゞ我
年月とかさ祢図つゝ物ゝゝどもあ事ばをちかゝ人
をなゞさめんとていで侍りけ菊のよとひとりふよかの
う僑ゞむゝ事をあけてくゝ事かりし為此ゆゝ志もゝ

やわらぎんさて江戸やまれ抱めてうしまきろう岡ぬりとも話
のきれをかいりおもちろ物りきれいきみもくとときて
よやまやきまひよりそでめてこぬりろちちきてた
られ事まてものこれまくすべらきの代くとかさも
てめてうしよつぎれおきれもこまきまなうとおびめ年
きれぬものこいひなりにわきそあやきはさろ岡の
めてこまて法名とれ中まめれめづらき事あろつ
るとうあしぬ侍へまきまちめとおりひつまで補
代みまを情地情ふれりのといひうイみ人のまやな
まてを富山の島を和明造栖となき廊苑のきな
岡まよちびき法廉の命をたと書んこれうへ多
右魚ハ漁又りめてあまくのうろまびどろし

去月れかとうふすむすり蟻と蟠ハたびひま我なれいこ
まれこび祢物ふれ蛇を獵師まあふてころろ物ま
のづこて我ま志力ありなんびを言するいややときれ
と一日の戒をたりゆへまゆすとへりあまのこあら
ど島けごりのれをどをかてこあををつためおか
しかとちくりせれなうのちぎりぬうきまハ人倫ま
かりうざれこうこめ魚きわこみをあどとをばれ人のこ
とどれのこうびかきこめ年月ハうらすくをき
つまで我をこうけまうひめこぬきぬまはこの
世れなめへかとをあしとおりへて竈愛の憂れ
てすびまを又をなめんあくのめこみもなさどやと
ちろどて卯月れ月ぬつまくまちろをき

つるをもてさいかきあたため作り始め窩をもてをくな
ものはなすびをもてあつらとやせんまをしたゑもれ
あいまきなれをとりかりに研磨もあまんよはあつ稼と
さしづりたきれかうとたにをもてこがふ島のあやかをまい
たしかりてあやまりもこをあんん後又人人の添削を
くとへこ海りん事を稼ぐふどりかりかり

東洋文庫

あつ物ものり上巻

平尚春作要

ときはいけかりあり蒲あるふ岡もりてこりに巻こうこきき
山のちげきぐ中よりなぐ巻出こうれたるよあるあり昼浜
形ちあひてす糸を入海よ浜巻りもりこうれと田
などをゆり巻れどとハりを魚すとをあんてど巻ありハ山
舎ちかり巻あるもをとを人のりいまれよ物ちびり
なり和ゆ秋ゆりもどをありまりて去乃日もつ巻
くみれどさ成ちらべて物りとそそめ巻れその
中よ鶏といるりかるあり昼寺山もも量量もを
のすへ又い法岡海浜のどばそちりきまずちよすんりれ
偏秋ちの又乃ちをりををあましばし又ハ風雅乃
乃ゆをたびさりりあちりりもく去ときるそす

足出て、ひきれいはねとなるうんいまめ〳〵きゝ潔こそへとも
世のあぐなる事ハ居所れ羊の世常ためとあゆゝ電光
鈴鹿れおく〳〵鈴蘭ハ晩翠をゝ〳〵ゝたことゝゝど鈴ゝ刀の
クメへとまゝびひをもれ一ときを鈴きれまゝう恵心
僧都のなゝ絵みを後乃世ときけばゝ成きよにこれども
ゝずや家みをうれ日なゝんといゝる成里へハ誰とそを
亜ゝとのゝ〳〵事ゝしゝたん秋みすはるゝきゝ力れた
よゝぬもれなまはひいとゝみゝ乃家成へよゝきゝるとゝ
きりこのひいとゝみゝよ付亜をとわるゝるゝしそれゆへ
きのれ日ハくれをれ日ハのゝりひゝれ日ハめぐりゝ日を
おちあもれ日ハきみよゝとあらゝでゝ鈴すれをゝ来来乃た
めを里へとよきゝみをとゝらゝゆへ刺那生憎れ理より



づきぬやとゝろこぶをゝりゝゆへ逢逢ハあまぐひとりをのゝ
るゝゝあゝ神ぐたゝきをいゝ御〳〵きをたゝ〳〵ゝふをゝゝぐひこ
の世よあらんうちハえをゝゝぬあそびをゝをえよほゝんを
もなゝぐをゝむゝ亜き事ゝをゝとゝい亜ばむ逢ゝれ法ゝゝど
をげゝりゝゝ里へゝるれをゝりゝあそゝかの右馬沈ゝあま鈴れ
地流の内中ゝるゝうゝゝづきゝ〳〵ゝありをゝ海ゝそゝりのをゝいゝぐゝ内
刺ゝうゝりゆをゝハゝの内ゝりのをゝりゝがゝゝれゝゝか薩あゝ〳〵ゝ中
とゝおゝゝゝりゝあゝてひゝをのゝゝとゝをゝゝゝゝんゝぐゝきれ

さてくしび世れめざれる事かつきなくれは拙ごとり軒を
おどろくと計なりぬるかれ年をめくりをいまあるよめこめる
爲しけるかゝ我ホ世をかくめんの外かゝ内裏仙洞又
いにしへの儒者出身のこれりとも大學寮乃あるとりをか法る
の勅學院の初習なる我をみめくすれを内か典よりも
智者碩徳れ拙ゝとりをてゆ〻ゝ関おゞゝ結業なうゞひいさ
とりれりゝやらんりをたのをてゆ計なり第七事ゝ也別の
二あり今日法者をはすめ志かゝ〻あすれいあ説ホ高教
内教外よりゝ也すれゞ世学をすめてこのゝをきこ
めよとりるゝ也ゞ俗さゝにさんゝがゝ三義教ゝなりりを
世学れ勅をあゝてほ世代いさめ世相の宅りいゝゝし
むいゞとゝよ世学をすめ貪欲をれこをとりゝ事いさなん

ずれどそれ時をたがへずうきてうまれきてうまれて座をたら
ずしてうすてを我すんのあるをなくはふきんの除を
きまく侍り仏大海并ふ摩訶止観ふを欲れつるど
ものをりて機をとるとのをくくとんよくすれそちをは
とならやいをりさて又人の世をも絡まれいまへめんた
人の結亨れあいをどらみてろせいをきてろよ貪欲のあるを
呂箱さそうてろわをとあまをさせんがためふ拭ろうてろ
の内ちを一の枕をとろ出て芝をまてみてい絡た
らば絡ふるのみのみべーせいをへまを廬生をへはまをせてう
たまを美漢一炊のあひをごみつる義れうちよ冬十年の
業花をときをめて美さめぬを時ろをい貪欲の念をひろ
めして人名百ひれ楽て今こうる義よことあるどやさうち

てを時よろわをとうれ明もあまをはこうミ
つきおバ板ハがびひよんいをりとんのや男ちちよへい
ちよち智恵ーこき薩なれをすかつちむとあろを
おうしあるがくき善知識ちをはめてさばめつ
きあそびをりあどやくい色ばろをひてのきてへきろ
ハ者は花のをあそひ詩歌管絃などはよのつ絡のす
ちち色ちかまあうて一の山あるをぐら極へあそゆい
ひうちをうまてうそぎとそもいろをかうしせよ
はふげおき社のひめえおいますあうちをかめんよこ
ばたどをへけり給れいをいをにありて
ふ社をるにすぐれちやいをれいるもをびひぬ色くゆめ
ふをときんまは天てろ大をれすをまは脈のをといれ

まてゝちうと眼やゝとゞまりぬれば田舎といふんあもつぎ
ありしかとなれをみをおくるれまゝ中みを秋をひきまよ
るゆまたがひなきいまゝへの花陽まゝ人のけまをとゝ伽
牙弦をたちけの神やしかゝるものをなりけるへし
歎れひきもあをちまゝ人をみれはめあがきれまゝ
ゝきをゝきをきゝんをれはあなき事をもちをゝくゝまゝ
たゝひ一番の歌をあをを清をまをとをゝ人をゝとゝ奇
またへゝるゝはうあひゝゝんゝ歌れいひあゝ
ハ古今のをよいきゝいまれのいづまゝ奇をよ由ゝをを
ゝやいへり乞は鳴うゝひ者ハ侍をあ人へハ言をのゝ
侍ゝあを伝蛙をはむゝ者侍紀良貞とゝ人伝者をまを
でゝをれ家侍ゝれ渡を女一人ゝゝゝ良貞けゝゝ

けまはゝゝひて家をきゝまへあひをんをちゝゝてゝゝ
をんをたちゝへりぬをの年おゝ年をゝゝゆけどありし女をみをお
ゝをゝを神れうへをかゝびの前をゝすあゝ成をまば伝者
の浦乃みゝをゝをを称ゝゝりゝをを人をを人をハまゝをゝ
いゝをのゝゝりゝ時ゝくハあゝ女を蛙をゝあゝけゝんを
ゝゝんをゝけゝをんゝゝれたゝを男へをゝ侍れ
清水あゝて稚波津の道れゝ道れゝあゝハあゝをゝをまぬ
ゝゝハあゝし眼者のむゝまゝ伝者をゝをゝゝ日ゝをゝ
ゝをゝへるゝゝゝれゝちを中の侍ゝひをゝのをいをれゝ
ゝゝまゝゝゝゝくをゝへゝれそゝちゝをえゝかゝちゝき
元もゝまゝゝ中をゝをゝをゝまゝ云ゝゝへたまゝゝ屋をこの
者ハけゝのゝをゝくゝ伝者をゝゝゝ者をゝゝくゝまゝ

えよりつ秋のくもゐにすみとなとすれとうやく
まて飛たりき清新なれはめんくよゆ弦をかこいで
いひつゝへ給ひでゆ以へハおれくゝ山儀いゝとそすゝう
よりつりきれくれ奇とぞおろり生れ中みとあとりハそさ
うよけや寒きあまそたなりの思惟りあくまづよりり

鸚子鳥(あうむ)

君をおもひこかれぬる身ともならはこそ
火よくぞ生まれといひつたへ参り往
とふりんてひかりおぶらちを頼み参りけるかひうそ姫(ぶん)付と
くおかりきんそらおけもし給ひぎ

雲雀(ひばり)

わがおもふ床(とこ)にはふせぎわびし名は
うちて雲井(くもゐ)にひばりとぞなれ
とよみてせしもかくして我身は人といひて日々に小君
をたのみてぞ参りきれ君とちぎりめさそてまつりそめし
女ん給ひよきあなりと思へるきしきなり

鴉鳩(ある)



うそ姫のたかへ物とはあらわして
金眼(えんぜん)鸚鵡(あり)の名をとぶれたまれ
と書て千かうれ姉うこぶちへ足せぎれは参りて姫君(ひめぎみ)は
浮まへすそてまうしこりやくゞきあらをもりのことて牡(ぼ)あらあきや
おもしきあなりとさてめききき

尾長鳥(おながどり)

君ゆへよまし涙かぶれて玉乃をの
ながきちぎりを結(むす)びこめさるや
と書きつけ添て山くりしてぶとくりきる姫(ひめ)を面白(おもしろ)き
うまれ給ひしかぞくへし　ハなし

同白

あはまろくたすがあれとそても禄かつくは

君をあひてまちをあくるや
さてさのこよひはめをはくまぬふせひなるぞはたくひれは
ひらこれのくしてゆきはけまてぞあれろ後しややの
給ひしうれなり

鶯

梅よ梅り梅よなるくあきゆふを
君をこひつあくぐのりなるも
とよみく親方れむ〜いあ〜ぬるををこに出く
鶯をいかのの若のをなれどをだこれ親をたなる
ぬなりきれと高人もの給へと親をりのを思へを考れい
ろをへかをれ計をりといひて正十のられおりふうわ
鶯姫君例のうを引給ひ使れ云をれい見いいまへ

孝道天皇代に代か大和れ國る天の寺よ僧れ最愛
のうれくうき童よありしがかどれくみまりて後三年
ひさ云童よ鶯となりてわされ毒よきくう初湯毎
胡麻不相還本掬となきぬ見成久京よりうれて見
まはくうまれ胡ぐたれきくれどをありてぐのくりのを見
くれと云奇たりかれ童よれ再逝りて海ませいを祇をる
ミなりも古人を鶯の教よ清水せうきて花の下りき
くうを云又を花中れ鶯古ハ花ならずてのんぐくなど
かめ給へりかれれのくよをてなくて人へで姫君梅よ
あひ掬りわまをきひあぐで花より後ハけれりをん
との給へり

佛法僧

ふくいなを岩またれてわきたる歌れ若果れ男とあん
すれい佛道の心がけのきわめてゆゆしき事ハな
し気とハ志まれとゝまるべきとハしらずとせよこゝ迄
きれなりや儒書ゆゑ書ふてあ生ハ高のゆハきぬゝあれ
まゝふいひて姫君へ参つひれはとまのこたのまんうや
あんずれと佛神れめくこうやぬとまろよ三十久字あま
のあの業うゆゑをさいと書付て使りぞわゝ参ら

三法のうるゆとあんしれつまゝやうふ

まゝ男ふるゆうれへ給へや

とよめうをいをうれつゞひみくにつきれなをゆゝぬや
うふゆをさゞめくていひきれをけるハゆゝあづき
て君のせれを者ゞゝきれとを帰れみをゆうえ

ゆれ鸚鵡なを天よ生ゞとゝうゝさんや三歩をとか
へハいゝ弁あゆゝゝ男ひゝふさそハ法れ世とは世り禄
ゞひゝへていゝ法とこのめうや南無三法無心やといひて
わゝハ世参り

鴫

君ゝ男ゝ示さをわ生ゝあつきれ
鴫の羽ゞき百敷ゝゝ
とて欲のゝばゝらざりきれゞ鴫ゝりのあされ
ゝうなれとゆゆふふ回ゝゝ鴫ゝと流てゝ
あハ使れいひゝなんといひてゝゝ参ゝ流ゝゝ
関てあつきれ鴫のを禄ゝ百ゞゞれとゆれ古今れ
ゝれ佛なきれ者ゝくのゝゝふハあゞゝゝしよきう

きてよハありとも君ハ男よりかさあるをんなのうのきゝ
なりもせいひてうら恨給ひぬ

鶴

君があゝり躍りまいりてあいぞやせ
〜ゑなきかゝ〜おこしをつゝ
といひて我かゝ〜口惜きハ鶴ハ君ハ語をつゝへていゞ
くんぞきゝつなれ事をえんや〜古人のいひ〜おく
人のとれ古ゆをバきゝてむゝ〜黒〜をなきど
よめとも我身れうへの器量をきゝ〜ばしに思ふ世ハ
なばいちゝや俗きゝ〜せ給へと心〜とゝりていひ事ハ
昭君使給ひし島れ物ゆゑ思ふ所ハ
ゆゝ〜をやりし大をそ島のすさそゆをきまさぬ人

とこ後くとぞなくといひて俗れのゝ〜ゝ島なりとの給ひ
きりさて使のゝひ君れハ妄説縛説画ハ面右ハ欲界れ
元生れあゝひとゝゆゝくとかゝ〜おゝいゝ〜へと思ふ大四の
おとゝゝ〜よ夷国ゝりゝ天人の鶴ゆゝ二の翅のゆひぐゝ黒
むを持て日れ光りをくゝまりをしゆれて後重寶
とゝ秦れ始望の波角鶴玉絆のゝ川のたゝれ
それ一ツなりしまゝ〜ゝ人をいひゝてせりこ
きゝをかゝをれ物ゆゝぎきなり其ゝ鶴ゝ白鳴れ孝あり
ゝて親ゝ孝ゆゝをゝ道をゝとする島なりあきがゝを
友ゝを愛ゝを持ゝをこりゝを二ゝゝを教ゝをゝう
ゝ生ゝかゝをしかゆゝをあまゝきれあれ中ゝこゝ法書を
えゝゝ給ひていまゝやゝめゝかゝゆてゝ雨せハみて

ろをろへきみてわがまゝ一筆のはらつとハらび給へと
いへどすゝこの鎌(かま)らくろこゝゑてくちらく哉とやきてひ給
へり

駒鳥(こまとり)

空をとぶ秋そこま鳥衣代のせて
足(あし)なみもゆくもちかへりてや

鵯(ひえどり)

衣をすゝる衣代にひめらひらら袮あり
身のひし鳥ときゝつへいまやせん

とよんでわまぶらいかしき身なまはなさけの道を
たのむでらりたのむとぞひのきげんをとりてぞつくへまつる

鳶(とび)



おきをせむと袮をせぬ旅の始らは
とびありかりけりのおりふたり
さよみて秋をけ神までも先祖(せんぞ)いかへかりかてぞ弟六実
の磨(ま)王の末孫(ばつそん)なりとくりかへりて始らくにのを
たのみてつくへまれどすぐ之の始つらわらさやまくひ給
へり鵄(とび)ようしとさてふかさとらふかりとよひ付目(つけ)さいわか
しもつかはなとをもちていひまろはようの小鳥の之
さへ一度の越(ゑ)歌(か)へおりか秋をハおかづり給かや重(かさね)て
け哥をまいりすれは文へしなきものやハらそ非とさて
めそ見れくるをそから始旨(むね)ありとて
くちおしやなりて彼ざらへ引おもし
ちるをつきも思ひしらせん

とひてそうつ〜きれ山うつ〜あるものかうおどろかきいうき
姫君へまいりあつまるものこそきれ〜うしは島い麝香ゑ
はれ未なれどあさくにおはひて大事なるもし大論
ハ〜ハ〜の麝香とあぶ寶言語よハ〜種の麝香あり楊
嚴經ごとゆんふい悲麝狸麝憶麝元長麝常
憂麝麝妙喜樂麝麝欲麝とときおひ
日なかあくあこの山のたゝ場ひとつの足絲のこと場すうの
國の端ゑたゝ大山の伯耆場相模場ひこさんの
前場飯綱のこと場ゆいひて國〜山〜嶺〜こよ麝類の
おりきすさいあど祈れ〜〜し鵠のきふちうひたまてい
ゆうなれ天麝波旬のきゆ〜ぎゆ〜あんとぎ〜けまなう
そ姫ハあきまゆて〜〜奇の悪業もなき神なれいそうれ

ひぐひゆうひく〜そよこきれ麝道へハひきのおく〜そう
出と〜うそ姫君といをせ〜をなまをそひなりきれてきと
〜ハきげんなりけりわなん

鶴

あひんがいう〜ふぐふゝ草深
賢人の橋れ色よ深ま
とはすうひく　野やなうハうと〜なうそなきゆんう
ふたなやハ君ハこうんとハきけや君よさう〜事もな
きとう〜こてそおうりきれ

史籠

いけうさて祝言をてうそ姫の
命れ知〜きやせめてなう〜わ

とはすき記くわまなくよめぬをとりてむひれおと
ひとさえへ繞そへわるれ中とらこらけきは姫君を閉たま
ひて鏡や思へるみ中ききなり

## 奥の島

よぶこ鳥よべともあぬをみつひぢれ
中かあそれ関やるきん

とかきこきてめりひを拾をこうれ為とへそやり給ふ為う
てうんを為もきれを姫君を為こきは和歌れ三島とやらん
いひてなくかき方ますておとにいきけと目をハうどとれ
給へいをとうまこうやぐきこおあ〜為ようぐ〜へきうこ
くハれつかいなれと直を沖久をとをざれいくやくのをかうち
ときくとくとく世れ中のとうのへなうか島とふ鳴とつ

島とをみを猪とをいひ猟とをいり出きれ正説とをべき
あをあをを万葉を紀藤を為きくをぬきそをふこ島れ船
山より鳴をとうんを古今を遠をのうきとしぬふ
中をおばつををくし峠を島ふあをれとをきけどふを
をりうくきをのをよぶこ島とをみをるこうあうらあを島
給へむつをかしとをへい姫君をきあきんうやおがきん

## 鶯

君をとも拾をあるうやみちれ
宿へ島とをりてとはきん

とはをめぐりをへんたちをを和をきのをを物とをきて
ぎれと法島れはまをとをすをのかえてたきハゆをやをれ道

たどりてきわかりおりてはひれふすこうれはまゝとて
ひ奇を垂る姫君よりあるまじ仕おしへと思つるれる亟
掌君ゝ千狐の裘とりらしる秦乃昭まれこひ給へいわつ
て舞れ國へまげさうん裘姫くして叫んあくのせきあるび
女ありひりこぜんの人れ中る鶏れはまゝすりのありてあつ
きとりまげ君は郎國れ戸あきてさうなく申意とと
げ給れときげ我もこまるまのが色したし更るハかて
アてゆまぐまれ山つれ祢をされとを君るあり坂れ國を
いゆりさでそこりかれとのいれりのなどにうらてく色おで
ゆりてきありさ姫ゆんと思つわづひうう楽きなり

鳴

うそ姫とよそるんせーや簡うへて

おきけをのひむさうづきをうれ
とうみてこ垂をるさうれだに拙そ結なれ叫こふけの
つ君れゝ忘と帝人をものさまひときけはあれ給の
姫うみくいひて使を軒作り

沖鳥

面や物れ海るあとくぬて日を
昭のおりひきき姫れとるなう
とうらをさひて事するにてあり君れるえおう

薩

つ迷をてすぬなれとをうそ姫と
いうひすりめれ公まをくへだや
とりへと使を出鳥れ事をい変及て姫君るかうあきれい

勸学院の薩摩蒙求をしらへつれとそ稽世よすゑ迄給
ひぬかなしう奇よろこ給ふ事ハ和國の風俗なれはたゞ
是給りしは清奇を六種のしかたくをとゝのへ
まつんすまでゝ書れれ題号のもむつゝ思給つゆ
つゝ拙歌ていかゝもこゝろれきるやゝ〳〵へ實意ハ中和
興別にて凡まりしは其こんをくを薩と化して内裏へ
かゝり給へりあゝ〳〵いとまきを清新なりとゆいまゝこかゝ
くきおれしゝとゞふよの事ゆゑ勅学院のゆゝむゝ
大内裏ハ　ゆくきこゝ家ハ学道こゝあゝまりて後條
せゝよゝ所なり其下部ハ人のゝをすゞめとはゝをゝ清
水勸学院ハるべゝまこゝハ薩ハ蒙求をさへづりゝ
るきんゞかゝてさいと迄て使をあまりりかゝるゝしむ

つゝきめふあひめゝるゝよたゝとひはなんをバいひけゝり
ゝをさゝりゝをなりて奇の如ゝ〳〵なゝてはかいなきをや
なりゝゝせんとあんゞたゝりゝりゝ

鶴

秋を奇すむ事をきゝどゝえんなれかゝみて心ゆゞき迄と
このゝひはゝをよいゝらゞをハ猥猶ゝとそゝりくゝまゝく
ま迄んをゝゝゝけまは奇をとハ友をたのゝて

おほあなき者とはゝまゞをりひはく
このおを清へとなすとゝはきん

さゝまをてゝりゝ奇ハ風ゝあゝてゞやゝきゝふよもそ
まぬあひゝまたゝりをゝよれゝ

伯牙島

いまゝへのもゝくさぐきあさなまを
あぐさかれせめてちぎり計を
とよめりまれいうそ君は奇のんさきまへがてゝやの
たまへく使のいひまれいこきいいすゝへさゝ人の姿中よ
てひとりれ義女よめひてなまめきまれい女のいとく
あまなれりもれいうくさぐきれとゝりふわゞ嚴を
うゝてとひ給へとちきりてわうまぬ又の年ゆきて
又まぢ年ぐきりかしいをとすゝ女もあゝてむゝ
俊ゝ信里ぬこまたちて年ぐきとはあこちちぎ
里ふうこなゝいせりくてしれきは遠ゝりこと業とかい
しうませめてそれちぎり程なりとゝやおりのあまり
たゝあの業も嵐姫ゝ山かりとれ年ぐきとハ時名れ

くれでれうゝふ年ぐきまよ虫あやさてをくをきりと
い誘くゝのせの見さうくいとれあゝ島なりやかめ年れを
おのゝくのおのおさくゝでれいと年いりとれためふいよか
らぬ事なりゝ又伯爵饒舌なれとも代よとい年ゝ年ゝ詩人
をいひ年くゝまゝの島のはまのあやをいすま年とみゝ
まゝゝとをいとさゝなゝ人みとゝゝゝ事ふきと女ゝこと
へりあまりはきゝまてゝいをおさくゝめしとそゝ年とゝ給へ
使もれもおげまてゝゝちぬ

鷄鶏

世ふゝ年ゝ年ハおもなきのなれと秋を代ハいよ年とゝみの
よゝこゝれたなゝれたなゝよまずハ法名よゝ神めら年ん
をゝら神ゝ年ゝ年でゝ神りゝ人家へゝらハでゝかきか

のすきはいちはやくづまこと申しひちとかりてあるけい
世れ中の物語などは関おがく侍りけるを和国の風
俗として伝聞諸伊勢国尋あまのうきてしりぬまて
いひうそ侍りしあの藻ちおこり素盞れのみこと
出雲国斐の川上におろちをたいらを侍りてのち八雲た
けいつも八重がきとやんりの奇をとゝ侍りしきけい和さえ
たおのゝ中なれば三千七百三十よやの神くも奇をい
よこ侍りべいつまの神をとりたのこなり奇を一首よもや
うよ初らぐやとおんゝけりが和を遊別みぞらそれりをと
このめい日本の俗語はい藻ゝこ年位といひなりて和
の字をさんたゞへて藻三葉と申くときけい宣てゐ神を
わまをいよきあとやおがゝ侍りんそそそそ申しけゐ
うこふいのんとそ為申ま石はあくまてたうきこゝろを
ちやだんとはこめ竹のおろ葉はなぞらへされ
石はれ波をとゝゆゝと記念てあまこたびぬうきけ
まはてこゞまやゝ世人をこゝ神ゝぬまはすがうの
葉うう

こひのゆきてらくあるやくさもい
ねのゆりれあとやそぐさん
さ示現(じげん)しゑへいちすのめ寄(よ)ぞろこびわをまぬさき
よとてすがりきさらめきつゝらゆきの奏者(そうしゃ)とて
ひとをたてまつりまはゝのつ称(しょう)れ光脚(こうきゃく)ぞのあらくよそ
思ひつまさて称(しょう)き艶書(えんしょ)れおりあらをわ〻ゆ
きり

ふくめらでそら飛こをいろめや
男てもみなびきりやきん
とつけてわきなくすることよめぬるやおりひきん
かくらそんやまぎきけくらまなれあろい花な
なさばかりれんとしひおくけうひのききんをとりて
うるりきろ

蕉

をうちやや和いこ川きれどふん
めろまも君をわきれやすん
とよみてゆりきろをのくくたまいこきはこの岡
の島ふをわきを他ふもりめいたびのすぬひきれて
つどめハ居舎ふくしてけいしいそうハきと詩人ものを
見家もふくてあやふのたりの生事やこわくハきけき
ざいりひのやまくれ云つどめハ社日をかくすを稼去
しそうとて日本ハ二八日の戊戌戊申社日神へ五
穀の成ちゆくといのうろあてハ家親の生ハきんを
まつり日なりこの社日をきりて潔斎すゆ神社島と
へそ神童のをそきしわうろれうへさこのの岡ちのした
ますへどなるりづりきるなる生活海ーざりハきこま
へとハさめけきやれ心ゆうざれをせめてれうひの西斉なり
ともとて少うあうくべのひぬさふあをはせバくとと穀ゆ
ぐれのやどなかさまくとかきそたちをまちてうあり
きろいくいるうるあんこかり

鳩

我身はいかゞせんけるやうこそ八幡のれ使者として
男山に住なれわきそ人すまあがめら所きはなれそれきげ
んとそらんとはおもてひと意地のあるひとて中ごろれき
とそりあまーうそ姫へ所こちきれどいあせもなきいちち
おりや男ろかゝ

我とあこれおとこ山ちや学ーめと
おおさけかーやら矢八幡

と申てやりきろ我うそ姫ひたびくれんぐろーかと
しけなけれどしるのいこのこかうーそのゆへは雨鳩婦
とうびせい姫婦とおとそ面の時はつまとすいこと
時きをひあーひたまとかときけどむつーきいりもれ中か

らんときひこ面へり彼のころ海ぐさう事あれと八幡
のれちひと他のあちり我国他の人ちに我人とあまど
いう神姫とい大切とおがめこんとあるそたきたとすまど
神意もおうろきなりそ三ぐるいあるちいけを
まー面をそのゆへきいうーへお羽あ平頼内裏へ鶯我
まう其鶯れあやとあこそあて鶯がこりこ海しけと
の鶯都まて言りつすあつちそれくへ八幡山へゆ京
姫とつ巡だらて出羽へくそり行なく新れかこことと
まとこやこへ巡四人り巡れで姫やの鶯とぞめこれきろけ
学いくこあろひこれみたり三こり新のためみはこー
をとろやとよめりけたろを姫れちことたのまずいかな
ひがこきるやこ巡かぜたけきるれきよちがひたまん

事おうろくといへい姫君そうめきりうまのくめんど
ゐづらひうろ家きかり

雉

うそ姫のけんくとすれ姫りかならで
みろまや情うくろ白をど邪
と縁じてぞおろり家れ御のろろまをきてひ給
毎ういをれつがひいまへ今れ事をを少おぼしけ
まはいさめをあてこまは神代よ天こより天雅彦
のりくへ品なしの雉とて清使よくてうしを名れすを
くまてまゆせいいやめ給へきめてあをを女まは
三位とてきんなり対いおくまたがるその一つしいん
とていづまれうくをきうひ給へやりへ姫君中

くうなまぬむりれまかならびといひ垂あくたりひな
みりんてをして後えまりあををうあすをらまるいい
じりくやかまいやのの給へをえれりひこ云けりれあをろ
ぎれかがまをの嫗女をそ南まを真女と云もあま
ふをまんをばあいづまをすをもひをへいなびき給へ
きりや表こ婦が七去ありををすをらくか七つれか
めりそまを今れをあろれなぶやうなれををれなを
しなくを給へをうりいめうをいさめきれをうをひう
みくね給へり

鶏

掛いつをんふくまくやいを給ひ一時をうるきはこまを
よせををとをいうやおもいまををんをりくようそ君へ者

をおつりたまへどもあてをなきあまりよきて作りわまえ
おなじあまりあてはくちはきるまれいゆりをうへて
こちらよりとゆつをまべしうれゆへさいまへ侍婢れ
まてさうづきれさ侍あちらへのわこまやぬまぬえう
あまはとまくいう給へハうめ扱れ家をもてなんとと
つねまいのすこどて京のすをとかきつけらまれ
おもりけをあてひ殺白を一つまいせいわきれるのなき
るいあしとて山うを使うて殺白を者てをくらまけ
まはをれうちもうれてこまいとうを給へとてひらきて
ひをうハ智恵うちまし給て奇と桑をいあなまか
沙迦奇あたまへ白ちらうをつあ給ぬるいあしとの
沙をうひとをたまはせひとをわきのるい給へといひ



ぞけ迷どをうちをぞこいしてあ給へりつれをを
ちめ使れとうりげあとやれもを迷をんさらば姫君
を紀をい給へはそどまぬ使りのををうあいちい孫
ど一白つハ付てをんといひておのくめんど給ひけう
おまれあうひづつあて面ことにまめきりう

鶯
鶺鴒
鶸
鶯

ん よ わ こ ん ひ い い つ こ ろ ぞ 花さ こ り
う 世 む く 日 を き え れ 新 の と も
ち 家 な れ た れ の ひ の 籠 巻 あ げ て
家 を う ま め れ 庵 の う や 使 き
為 を ま り ま こ の こ ろ も ぬ き 面 こ り
と つ 初 て か き を き 給 へ り 日 う こ 四 年 四 り る と 度
え ん き て し て 却 り 給 さ こ み て ぬ こ り 巻 中 な 山 こ り る
使 な り 巻 を 主 は 是 を と こ り て ひ い な ん せ 巻 れ で こ ろ こ び
て 吟 じ 巻 れ が 俳 な 者 し き こ う り 花 り い は 白 と も を 度 行
と 見 給 ひ こ る や 世 れ 中 の 連 歌 と い へ 学 と 大 四 こ い 初 会
な 去 侍 り 白 と も ふ く 者 と 我 中 と こ る 者 な ひ こ る な ま
ま て 大 ふ 吉 れ 白 な り 出 え ま き の れ る ふ 月 を と き 新 の

女とのうづ[illegible]を我とハ思ハ花ハ女ハいやとの仰ん之に
ハ○第これ白ハ蔦[illegible]寒あけてさいへり日をハ[illegible]
とこてかろを戸をい拾ひ[illegible]て我をハよ勝ゞと云ん
又ハ白めハ寝ろを明とめりとハ[illegible]ひのあ男ハ濱の寝
ハめを明をんてうれ[illegible]きに座れうやぐきまて湘
の寝ハをく屋ハとやあまりなるやゝ白めハぬ
まさりの白しかりまこと沖をしいひそへよさわうハ
なれと濱の面ハ有ハ面さう神ハきこゆ是ハ是もあて
ぬ悪ハきろまていまくきの白どもやさくく我をいこ
うちハ衣まてきひてのあひ拾ふとてあさま
しくと云てあずりをきそなきをれとハ衣ぬ

駕

みあ[illegible]ひをなきれ寝りあふ
たくみいなるあぬとくこさりあ
とくこの〻物もいをを男ひ入これ神まて彼をたのの
ハ例ハのいをハつがひハさがあてハ島ハなくまたひま
あるまかこれまをつきあしあをさへたくこあるとい
へい島ハ中のぞんあやをあるまのこちハたくこハよ明ぬ
わざなりをいゆめ拾へハ彼ハ白くのいをくこあやをうろ
め拾かへきみあるぞ百寝の内まて内逝頭相嘗逝五
信こ夫丈法道五信為こ[illegible]たあんどやいへり未立坂ハ悪
ま紙ををこハ屋くなりこまは内裏ハ低ゆなを彼た
くこてそうろんすろ宮なをなりとかめきれとハ氣ろやいう
ざりをんかへいなし

鷹

はりへとも毛ごとにうるまは春の雨り
ようやなくはりうひやあるん
と詠して我先祖朝臣もたまつきはつ〳〵よもぎの
かつこゑのはよいかまでわれ
ふるとさくはりひ毛ゐてよのなかのあんかきりいたのこ
なきらんと云てそつゝ毛れ日うゝもりけて春よりんを
こゝまに毛ゐけ〳〵きよりゆゝ稼て礼義ゝ〳〵俗まゝ
毛をれかゝるれるゝはゝうとすめ毛れどいうをしか
け毛ハつゝひゝ毛づきれゝ〳〵のあゝとそゝとそよき
日ゝんてとゝりひゝさ毛んと詠して我ゝうとゝ毛ゐよや
うようやゝをゝよこそへてゝ毛りつゝいゝおかゝとゝんとめん

二十四

じはり毛り

鶺鴒

春をこひておりうへぬ毛ハ山毛れ
おりれ続ゝ毛ゝんをゝびうゝ
とよめりを毛十かゝ和傳て人ゝ毛ゝ毛ハ時ゝれ
ゝ給へゝ毛ゝひゝるよのえゝ〳〵よゝゆゝぬゝ毛ゝ歌ハ蓑ゝゝ山れ尾
を滝て毛ゝりおりゆゝ〳〵ものゝ尾をまゝゝなし蓑れゝゝ
とゝ人毛りて妻れおゝけれ人ゝけ毛ゝ時鳴を山鳥のお
ろれかゝんと云ゝきひゝゝうゝ安ゝゝ毛れ中ゝそゝや
なゝゝゝなゝゝゝゝひゝをゝびゝぬゝそ使のおゝゝ毛ゝれハい
もと婚れ中のゝゝかゝぬ島を毛てゝたゝひれゝりゝ
ゝへゝゝおりゝそなゝゝれ島よハゝ毛ゝゝれ北のゝ

是は大国に鸞といふ鳥あり此ものを或書に雉ににたり
見ル則天下安となりけり此鸞鏡とみえて鳴声つたへ
なり是によりて鏡を鸞鏡といふ又太政官が
花と鸞臺といへるは此鳥を彩り鏡を鑑てまつ
りごとを天下に施すべきものなり此鳥又雉に
まかりこれも鏡をみて鳴声あり古事おほしは鷹ににて
の鸞称翔すて山鳥なれもおとろしにおもひ給ふ鳥は
むかしよりいまに及はりのもいつとは鳥のみて給へりしより鸞ハ
くちつきれが三ハかならず鳥ゆへくちばしの黒きをとりては
きこひ給へり称きまおかぬ事をいふとやおかしきん鏡
まかせきり四十がそもつらえて此も鏡とハ付きぞ
鏡とひとしく候ふ事よくみつかでおもきひくしまハ

さがんとすれとむつかし志るがこ出あひハのまんとされ
むかしそもかおそぬ鏡なり又かの芸れがかのかち
なれは志よくりけな其ばきらふべきみをおもはれ
のかくしハいらぬよりのなりまんずや山田山畑れおろる
けりれちりおくたれその中をくまもさうまるやふりぞん
とくていらぬがくこのたそみきのうやとちにて志つき
まつりし其時四十がくそたしくなりてわきハゆくの
かのよおしくいえきんすらゆめをなし此のうへ承ち年
うけていそぢはとよびよそ乃きてもおしきやうまの
志つまござ家をでんもおりかけぎハさておもや候り家
きさくへていひきれハさそく以今西猶流れこさびう
けるつう待ちは姫君にれはつかのまハみおはなれま

海をうち給へりたゞしかくこれをとりたまはぬやき
おくうちまゝにぶつるものをいかゝ一字はむりんのしとな
まやこゝのあまはあまへあすびまぐ
これはまりかくこあさくんあやいひて和漢さうに
もてあそぶりゝ又月はくはんの百練遠とて永中
そいこれくこなりこのあ海を　はつかくこの
中まそむくたまみかくゝ月のかくこなりあんとよこ
をいそまあり事なりあいけこれくこはくてくれ人のみこ
とよまりしかくこなりは守れくこはむゝ雄畧天皇
のはりゝしはひかちとおうりて是よあるあとそ
たゝの是りれかくゝ又徐福ゝ遠ハ人のかのうち
てくこは世れ人こそりてゝりけまはわゝ物とをれゆ

なましとやかりれまくゝ人うびかれと是守れくこといふと
をゝ又是をまりれ是れ物くゝ遠ありこまもゝ人れいの
うちをてらしいこくきたくゝなまはさゝ國王ありてけく
こをめとふ是れ出こけまは是をやきりくんとゝ給
ひかかりかくゝしてなりくゝをのりれくこといふれ又
秦始皇部信の海深新ゝ二の是まて一ツれゝびみをな
りてゝりこ三人なりこまハ高人のまゝ人のまゝ出ハ六勝又
臓みかとくゝ後あゝハまゝ毛まみれありとゝろとこまりも
をれりゝ遠と云とゝはかりせりくゝあまやいづまてて
おりんすれゝまてゝう海くゝむゝ物よいあゝむどこまのこゝあ
をゝ神代は素盞おのみとと出こ云ふ人おりまけりまて
磨乳脚摩乳とゝへるまゝ婦の者一人の姫をりそう

いなづま姫とあづまし姫とハ波の大地ありて今夜のま
れんとうむ其時素盞嗚尊みとし姫を救ようえ
さうせバ大地をたいぢすへしとうう物事ありて行方
大地をたいらげ給ひて稲田姫と夫妻のけいやくし給
ひ時ハ天すうつ八ヶ所ハ天照大神へなり給ふ
まいりせけるを素盞嗚の尊と天照大神へなり給ふ
聽徳天皇代清代の時人皇へひめを給ひて今ハ内
侍所ハ御くしこまりもちなる宗祇天皇代清宮まい
あためて姫の古き流をハ天照大神へ入まいせら
ゆ事あるべきを今ハかいしどう給ふおさめ給へり山
か八尺鏡とて天照大神の鑄させ給ひしう鏡二ツあり
もめいさせ給ふちいさきハ紀伊の国ひされの宮といふ事

二十七

給ふ後ハ御くしハ伊勢ハ国蓋見ヶ浦ようおくまま
ていづまもこの国のまゞりハ神となり給ふ
ここ女ようれハ日本ようあるいきとしけれのた
うもの物ごとようきハまれうう又生をうう物のおやとと
こぬハなり

人のようおやようにてようりのを思ひ
き時ハ物ごみをそろるを古人といひしかりこをいやと
いとなすておやのおうけをみ給ふんや不孝のたこと
あさましハかりこれたるこゝろのおろかなる日をうとみて
いとをいきざれるようとめへをいとをいくられひづこた
うるのいづこをかきこゝろとありとえれあ姫
表ハハ物語こ後うに女給ハ山　心為
のお流れ後のくるゝをいうげやうこをむひてこうと

学てゐざりたりきれいはたごのめんがくかど、
しそうたちきて

鶴鳴

我を君いりたれ中君中こちと
しらせなすびうぬこはうめ
とよめれを彼はゆきてみをなりひ島い祢代ちか
さいと絃のあるもや名を出とつあど産こきいだ
これい彼おりも島をぜいひて、すへの方人の方を
い泳くよんえこちさうめ
げうちこ如産こきこう邦　あるとい彼おりも条
をへをハ人を彦泳ます。はごまーあをかりて
よこれと島ハひとつと又我門よいおおりも条

なくあへよけさ吹風よりうハ産よをちとをよめれこ産ハ
古今れ産なを産はまてがふのせがこきうなりとりを
行とうおが考ん姫君とりあへを　ちこぎりき妹兄
の中れ中こちとまひまろひ産世れためーいとの彼
よを使のこうひうかこりけ産ハ産と石をりけは
りやおりひ考ん産と石をこうどあもいこどもく
だこそぬこうもこやこ
対島

こちれと君よあてひど帰ら　よ
ちうーとのこもなこどりまり
とこちすきび彼ひ考ろを山こ使こそ彼てこけ産ハ
姫君兄彼ひ奇のいこちうどーこあ産ハ使れいひ

はるかにしらたまづさ短冊をまいてせらるゝ方ども成出
らるゝの中さこゝもかもきれたるきれてこいありがて
しそのゆへいむ〜しきられ國のこうぜれるを杖字と
やまつゝ富士のやこをいて接すてみまうり給ひ芸れ
視聞対面るうゝ給ふ島とまりてもあやまひ〜ま
しくけん不如歸となきて接へまでを我方へうんま
いこうとすめ給ふ又い都國とゆるの王他ゆるて童
めもいくうくうくとも不如歸ゆを明給ふと云伝
をあり今の奇ようらんれど君よありてよめる
をは故事なるべし又は年の田長とあづくとゝぐ
の田植つく迄ぐ叫るもぐでのたおさ成あれ〜ぶ
とよめるは奇せり〜おれ〜もられどは年丸山もれ

月さ月ふまりて農をすめて過叫不藝とれ〜ゆ
とゝぎとゝきこゝもそ迄ゆへは年丸田おさて云とひの
拍あり山をありぬべき事や又ひ名死あ丸山もきき
うるやゆいもれをいすへ〜もりゆひつへうるゆき
どもけこ迄ばのこう待りゝ又ひ名をむむひ島とれ
の名田うゝ島田れさ名さあへ島うゆひこ名こう
花名り梨名ものげ名ものて歌て名たそうれ名いりせ
名たまう名うけた名めげう島さゝも名ゆゆひ名
なぜいろ〜りもてあるためゝ誠ゆとたりてあそべ
りあるひい　一鶯山島曙やゝとひゝうゝ　ひ名う
で山ゆ名ゝして叫名と云又　二殻ときうゝびいゝぐ
りゝぎとゝ歌あ丸ことりもりとおどるゆ丸

とのこされ給ふは大ぬしの島なわ〜どれく〜たまへ
らざめやを以て姫君　まそ志げ〜志げれたおさとよ
びこそで身さし女とちりそけいく人とくきそていざこ
きけ給ふ心うけやりそけれ給てはとゆ給てはそ
叶給れよろこびこ面つんじはよかぬそりくれ使よ
なりむざあるきれこそてくるをひとりかるるもお
くゆかれ宿のくらもすべ〜ぬりかおひれか
よ又たがひなきれ方様れ中ごちとなりどそよと
られ給ひくれでれりうをあて宮てれわ〜びよ
こ面つりやせんどりうちあ〜をつぐをちろぬん
う給てくこひちごちてそゆきけり

雜

物面〜と志のび車れめぐりあひて

君より別の名るとなるまし

とよめれを日ぬ入て姫君よみせあるをや行
と思ふ給きよるぬをも志ちすそ給をわがきろ
をとぬひていへるの侍者きな給ぬいをれ高い
いつぐやぬ千ぬよそたれくいて給一後そんとくれや
志給ん〜と業すあ〜給ぬけ給で面こすそいでいひきろ
て志のび車れ哥の他者れきよらぬもあるりな
給はとりすはよぬるあまこあり様のゆへいと人家
とすそうやす給度れ様ぬるるのあるりたなれ
てすそあるけい半ぬ乃不浄なるゆこ給二又高世
の武士の道奥のてゆり抱とて拙の名りけ毛さやる

のうろひあ〳〵てくびもゝ尾羽をぬきとられこゞろゝき神
こゝ迄二又東右乃丞をたゝなばゑ已れ日のうゝひの対
みをあゝこゝ迄長くゝ此小志中間あゞのをひまうゞ
きまうして座名あゝを所くゝ元めりそいてきめまあ
ゝこゝ迄二又人家よ任とゝいへと不せきう海どのあこ
ゝをゝやをゝ志むゝ迄ゝ椎業河或海法島れ任不とをを
あゞうゝて人の任家を色つゝひまうり我家とてもうゞ
借家の神ゝて右とゝいゝ世のゝ色ゝおりゝなきゝゝとさう
しらをいゝて使の日ゝう剛橋れ道理とゝきゝてあうゝん
ゝをゝをたけゝゝゞ一云をいゝ称いたのゝ迄ゝうひゝれく
又鶏よ高座のゝゞをあゝこゝ色んもゝをゝがうり又姫右れ
心うなきゝゝをゝうゝそへゝまゝゝがりひゝうゝもうゝちゝおゝとれ

ゝ人家ゝきゝゝて嗤今れゝ和がゝうすきをなきゝゝ
なうゝちゝあゝ第れゝ一ゝゝうゝはゝゞゝまゞんゝをゝゞ
めてきゝ法へそうゞをゝゞめ我身あゞゝ色ゝれりのゝとハ世
の中乃人ちゝゝし法よ事まれなうゝ座名ゝとハあゝく家
くゝうひ法へハよき島ゝとゝてうゝこゝ迄一又ゝ綿付名れ
ゝハ世の中さハゞゝき対内裏ゝう鶏よゆゝを付て開くゝよ
いゝゝ志めてまつうゝを法へハ法ゝよ鶏のかゝまれまゝうゝり
こゝ迄二又孟嘗右がゝんゝうゝのせきゝて島れゝう称ゝとゝかりも
対のゞいをれゞゝまゝを鶏のゝ徳なりこゝ迄三又常世の名れ
いへり是ハ日神天れ若戸よこゝうゝ世法ゝり対八百万神
たゝう神楽をゝよゝりていゞゝ出ゝんゝとゝゝ対竜宮れ座名
とゝめて和ハ明ゝうゝゝを云ゝうゝふなゝ世けゝとゝんこの

じろなる事は法名はうちはいつまでの日神事のれそだち
叫くあるくうれ名ます俗すやかあ事はれまを男へと産名はは
かます祇たぐひなきうまりこと是は

まこと雀とり　ま綿　材とり　雀つり　八このとり
くごけとり　ちごとり　とこよとりあぜいふて
あまこのあとりう給へりこ雀もにうられ鼠ちなな
まかとけのれう人あを十号　宗鼠　そ成のれれを
をきりときうをとこ雀又河人をも鶏流鳴者
陸のりたをきりとりう又四月一日ちこ日までを
ちくの日せりひ七日を人日とりひ八日を穀日と
いありこの日れうち別していちひの一日をバ鶏日と
て雀とられ日とにごめ給ふるの名れ鼠えありずや
こ雀ちにか宿職令あをもにはよい鶏右番をつこてを蘭
とふぎをとりふをとあハせりけ番ハ一まを右番をくを
るとてを給くれよりひをくをくせり雀とりの右又

り給くれ徳をうをへふれゆへふも島の右はたを人て鶏右
番とりふちりの鼠うふ大鼠小鼠りををりてかまれあう
島をあをくをを給くを雀れれそをかハふををを
ちりをりふををづくを島ら雀ん雀云のあうをりをりをぎ
日りをんてあをりりりてををくを生けう

鶏

まめやうに我男ひつれあ給をは
子年れ後もを者よりうせん
とをんををて手つ事我身れ而生れ弟をうぬをを
かめりて給うれをどうへをわうを生れを後姫者をんせ
を生をを生ををををたまりを対をふをこ生は神め給ふべ
き神りをあどいをへ他術をゆうひちめをどををを給れ

祖父ひよ麿ぐ式ら佛入滅れ霊地を潜林とそつれ式ら
とかつご逝ら加やうれいて逝を一筆れもくひいあんとそれ式ら勢い逝よりも思い逝きん
姫君まめやうに我身を却りひつれ位不治とくきうば
ふづくてもうんとれ業をそめ給へと使まびよ給こびけ
おとあん

鶴

祖母りの時くうあるり波よれど
よくぬを君れあくうち歩り逝り
と添して使りむうい年をもや又十年をこゆうおいの
波のまへもあぬすて小松さくたのまんたちづたお
き男とちうんゆくす糸をうけても易給ふ世もづれとひを

めゆりぬけとれ逝れ給ふ云のつくきをちまは花の咲くう
んためくを加くゆ使れ加りきれい君も鶴と思ひ給へり

千島

作時を君はそそぐくづうり
あやなハ代れ友ちうち式
さくみくく書つく祝申りひくひいもうゆ逝い逝れよの
と貴こうながりくと我身れうへまなさづやとひて白う
のめれうくく式のこまいくく嫁げ逝ゆ行とう云逝ん加へく
ちなし

都鳥

あとさきうば君を逝りくいざなひて
角田河原を伯身とくれ

とはすきひて、まゝへの事ともあまゝかりあまれ
ゝよりよ位出れ異ひやいひてゝをいはせ十四ゝれ有ゝこだ
ちへうわゝ事ゝりて行てゝよきいわぞよんせゝてまゝり
ゝ見人槇と以へ名い人道のかなまは いゝきゝゝ云よあゝハ
ゝかゝゝ人皇れ始め神武天皇大和れ橿ゝ家よ初ゝ
給ひゝもいまもくかゝゝこよ初を極ゝ給ふゝ三十代ふ
あまりは十度よとよ奉り紅蓮紫河の嶽ひいづまと
おろゝ有ゝ名ゝれ日出度都そゝちゝてまゝ国せは
ろゝせゝ河れかゝあはあゝとれ殺ゝなゝていと以へ姫君
東海れ角田河原れ川名はすひとゝすゝ初あゝすい
との給へいさゝみやこ島のちゝおゝ給ひんとそいひまろ



水鶏

君ひまれよもゝやを稀やれ戸をたゝくは
ゝゝきゝゝてもありんとそ思ふ
とあんよゝて縁無り書つけつゝ使よんせけまはゝち
たゝやおりひきん知おゝゝゝゝゝゝゝそゝりまれ結
ゝ人たちをなゝて通行あゝふ例の戸かそをゝて
きてなけゝ逃まれとそのひもなきゝや

鶺鴒

みよゝ初ゝ簪やこの毛もわゞ初と
面をしゝゝ思ひゝゝゝ
とうけうをうけ知て見せ給ふあゝて
お逆は使の戸まれも是ゝいゝゝへ逆子伯陽と云れ人鶺

鵲の二つをひきのそれうちなり後夫婦人天のの
星牽牛織女は二星となり天の河を隔て住給ふ事
いとけゞしかりとそ七月のわたりをゆゝたまひる七月
七日を帝釋法華へ行幸給ひ日のてらあゝ給
ふるなけきは二星のとりをゆゝ給へり其時むら
のちをわをまれは島まく翅をあらべて橋とな
てゞとこけわれの時七夕血涙をなゝたまへは翅
りみられ多まふゆへ烏鵲紅葉の橋とは云ふ
ゆうよいゞゝ事ゆきこ方なりとかめけきは多ぬきゝ
の義ゆいたなけれなけとやおゞゝきん

鶯

たゝ為らを河をさきよすれゝら瀧の

こらてこぬてみ者そこひき
さなんかきをを使りて行ては名ハよゝゝも妹りとに
ゞら河さきよのこ住つ契りもまれて多まあけ
らぬ名なれを后姫のいこまに順すゞゝあとかけ久
をありと関つゝゝよかやうよあらをへてかこちち
給ふのいおいうなれれいゞゝなんぞいたなり
去者人かゝゝいなり

鶏翠

山川のぬく井お住てられ奥に
くふを味なや初りふ身を
関けうとられんをおく涙ふきりとおゝ忘てそよこ
きれ朝夕おうりめう奥れなまくうくなまいあれ

君はたのまずこそいひ侍りまし

鷺

君まつ浦ゆ出でぬれば毒なすむ鷺かな
なりても猶わろぞくゆき

と申て戦死仕りかど殺をしたいて中れ法ひと
このこゝろ侍りそうつて人せまいすれとなこゝろ
なれ神とバ人なけ申は使のいとく見い西表御門
ちゝ仕のくゐをこゝ海ゐり島表富類の座とそま
しゆをうへい案の事いいひしろれもくぐ〜れ西し
あくてはそおうろ〜きゆといへい姫表ひまたいゆ
まれ森の鷺あくはあゆとあ人時をを申てこと
ろいひすて給へり

鶴

君代男ふあ〜海ゆ田よおりくそは
く井是とそきつけてすくれまそ中まれ彼知次てし
ゐハ鶴とも白ゐるとも又きそ天鶴とも品のり給へ重ゐ
鶴毛よみて歌で敬祀すと仰りて詩人を鶴脚花の
間乃ゐふたゝ人給へゐかどの君なまは侍西ゐあ
まうと人と姫君何と郎人なゆこ給ふ侍うまそて
けまはかうゆてといひてゐまぬ

鷺

わまあらでようよ契くて細ぐれ
きまゝんかきりいうこてゆこん

と詠して使をまちてをくらんと志けるをあくるとあれ
ぬとをどろかなまはまうをさしうをきりて鷺どりをぬ
くるみをくふ我もこゝ出れ奇なりとまいりぬんとて

鴨

我男ひうの御へたまへとゝ出ふ
うもの袖よ、いのりめろこう邪
とゝみくをとれていくゆをやをゝ者れたのこゝれ
使のこう紀ろ紀さいと、いと一どふうゆり者れ使ちう
らよをとよいぎ二つれ短冊を一どよりてゆきて人名を赤
らす者は姫表はけを清んを御ならびまゝ由せい
行とその給りれるか行あるめて御給へり使のいひをゝ
は島〳〵いつまをろうめ給ふへゝ者鷺名ハゝきて

契り姫うけ者はこ者にあへんとや鷺鷲れ衾とそ世
の中ゝ人ゝうちひ給りいせとをり給りてこ者ゝまゝ
事ゝあじゝ池名よをゝのつゝぎそそ〳〵つまあ
そひの事〳〵きをげ〳〵もや古人もの給へい神ゝこ姫
ゝきをるとゝんてゝうは者のんゝゝりゝぎをいゝ我のえゝ
を宮めゝ〳〵ゝ夫鴨をいゝゆ〳〵め給ふべきにあゝを夢
道すあゝをもすゝを海ゝをあ我名ゝをれゝうあをゝう
き緑の名ゝ鴨のそ及いま云の山れ及ゝたゝへゝを〳〵
てさ海〳〵ふなゝめをのこゝされ給りなゝ我ゝゝゝゝゝゝゝ
事やけきかまれあり其ゆへい海去のこ記観世竜
者猫のうちゝ亀鷹鷲鷲皆説姫法とそをゝうを
を妙法をゝゝとゝとの給へいゝゝきるゝひとゝゝふゝへ

しゐてとゝいへど姫君たまひきんいこゝろみるまでもなく
名まはせ給をのこすべきあるべきにつけていまゝへ
と申ようはの間いくほどもなくつようなひとをとめをと
きつさやいふありこまなむ〳〵法乃師あり女星ような
なひをとめさいふ女ありそまこ二人のおとゝありて何
らそひきり一人をはちぬおとゝといひ二人をいさゝだおと
とといひきれ男れんざしづまとも〳〵けまは女男ひ
わづひておがいしてうせぬ二人のおとゝを又自殺し
きれどこまこ二人のひかをい中よつき三人の
おとゝのほうをいあよつききりこまこうあひおとゝめれお
きつきやいへりたきひきつれあしけいを万葉よ
いまゝへのさだおのこれ妻とひゝうあひし女のおとゝ

きうこまをよめり又花山院のほうを法大和物
語とあんなは生田川ようくべるあるをい給へ矢はあと
ほゝこんかゝへすびりんといひきれ三人のおとゝうきき
ゝに男ひ水名を一どおいはたいざれ淺澤やなり
きん三人のやとりにおりゝ女女んゝあゝて水よきびめ
くれとゝもごりにもづゝ一人をてをゝり一人いあゝをゝ人て
志よきあるとあんいりのつきあるゝまどゝこ海たのせ給へりさる
世よあまゝくきゝるゝなまは海たこいたんいむくいあれ
ゝ史今こかれてゝ人ゝ又いはあれおもびなまは何
とも男ひよきがゝきき事へ亞亭をいとゝのくゝの中て
ちゐ給へとておまゝをゝちゐぬ使もとゝりとやおりへき
人をのもいゝてをぬ

格

君みゝをそなふまして沖の海津名
うき身とあつまりてきれどもや
とうき付て塩干かゝてぬおきれ石を身のうへなりや
神いひてわつきれば彼れつゝ入せなつまれ
ゝんうゝうゝべるもんもやうゝかつつとかつれいふそれ
りへゝあゝていうゝとそうやぐきそどすそどよこをう
関をそこうのかりきう名をつげむかどあう君うあ
ひとやいひて名りきうゝ男ひ給うんきう海りき
るやとそいひおりきれ

鶴

つきあゝやおりひさすそゝ沖の海苔

海うきかぐうりいうこうてもゝん
とゝまして我男ひのかゝとゝ代い君もきうゝ海づよ
きゝ名うふかゝゝ家をかぐうりゝあゝ給へと一をぐうふそ
ゝをそこゝ移りて入せ糸すれと姫君いこまゝろよ
かゝぬいけとものをずうやくきけるいあさゆすぐう
まどかりふかまてすをきづゝくきてこゝとゝ彼
いうへきもどいぬゝたのまれゝひもゝやを男ひきん
すれどりすやてうかめ給ふやよはゝう緑ど祢代の
こゝかとゝよれあるの史蘭降命いをのづゝ海の幸まゝ
海をれおゝの衰実出見るいをのづゝ山の幸まゝ
まれあゝときたぐひまちぐへきを給ひてをうれんゝの
つうをおゝのゝとたりゝ給ひ名毎でれゝこのう糸

とのゝこむとへうたまひたりひよ 将源〜給ふよいづ也
をさらとは給つゝを時をそられみこゆこやとうゝ給ひ
ゆゑでこれ又こへうゝ面ひゝつゝどりとこひ給ふ奥ま
さられてうゝあひ給へいちかゝゝあゝてあゝしきつゝどり
と一箕よりてかゝゝ給へどむゝれつゝどりあゝずは
さゝじとこい給へいせんかゝこおりゝまさずや塩土のおきれと
たのゝ海神のゝやこかゝゝうゝ豊玉姫とちぎりをこ発
海神をたのゝ給へいゝ大小の奥とあゝめてつゝどり此事
をとひ給へといづまゝ也ゝゝ赤女のはやすひあり
とゝうゝ赤女の奥とはやすひはゝとゝどりてうゝ
給ひゝ為とおいでゝてみこへまり給ふ其後ゆゑでこ
のみとゝうゝ此ゝれあゝの大園海命へつゝどりとうゝ

給ひぬゝきけゝかゝれ神ゝ仕ゝ清うへまゝへうをおどりを
志給ふ所ゝうゝきゝてゝあゝゝゝ事いゝうゝ山岩の話ま
を中ま白鷺の家我ま水ゝうゝあゝうゝ賢人のいれゝ
またゝへたまへいなゝれ名ゝはあゝをれ色ゝ面ゝんとゝへ
どなゝゝ玉ゝゝ也んゝゝひてれゝうとて面ゝえゝ給ふ
使い我とゝとやゝゝこら也んとあんゝとゝうゝ

名を

ゝゝゝゝゝ海の面れまあれゝびゝ
沖中川をまゝゝゝゝゝゝと
とはすゝこひて我すむゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ彼をたの
みてそ面ゝ也れ姫君又給ひこ也 みゝ面れ沖中
川をたゝぬを君ゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

音をかぎりて流れけるやんごとなき花のいろもゆゝしくぞ
ありて打思ひ出のこゝろはすてがたきれい桜のかちを
とて　たのまれてとられてゆかばもろ男とこゝろしの風
よちぐやせいひやりつゝいとゞ出りひ給つやらんとひとり
うちまもりまち侍へ法名をもうそ姫のあまりふつまき
なりしとおぼせまくやあり給へんとてつまを日ふひ
くまれなまち給へ日びゝきさ君やしひのそでめつき
ちわくはやこのゑうよあやこ給へるゞいまゞよりぬやき
らうきゝの日をちつけと衣ゞゝ給へ者をひもな
しこまはしはかりひゝまゞけさたんざくれまさりと給
うをなくおいゝなりれんさゝいつまゝそりゝつまをを
つゑきふもあゞどとう給とかけき給者ゝるんとゝ知を



日をまゝ知ゝろへ給へいとれくゝ拾ていゞせんとい
ひゝわゝはやこゝよゝき移ゝまきくふあじゝゝひてさゞゝのゝ
の師とゞゞゝよとそあまたれとりくゝとゞゞゝやりきゝ中
よわきそやまりゝはゝりけまゝはゞゞそきていゝゝ沈
ゝゝよかゝちけゝいこ生ちあくいゝゝゞへて山市れ知
ま生れよ鬼は師とそやそゞよあまきゝ持律持飛
まそ有髪大徳よの法者のやゝよきく待といゝゞこの
くゝゝこびけ時をゝあゝきゝやしなりれ枕加持もあ
ゝゝやゝふの給へを山ゝ品時よゆきそ業用をこひ教
たゝとそゝゝやまそ志ゝのゝ恵よゝ待り

老僧いきけんよろこびめて岡ひじ姫君れうふさを
よそおうてうへうけ給ひて国しれめよかつまとときめて
つゆでを相結ぶ時名をなれでやそまいりんとて法同寺
なる表たゝ木兎ふ僧の蝙蝠まてひきぐゝ夕陽れ
あるよりてとまりて山くみ彩くまのうくの
まぐゝ主成つてひ家れとうよ姫うきのびてそまり
主きうびう君ようせとそまつ主はたまこめてきを
のゆく恋をきうぬけなれいをがこの花もうひうひそで
ようち後うこれとこのあうちとうひうんかこよ海
ひてんやいつまてもげふりとやはひきんおまふかちう
てうどめくあがどうをきめうおり姫ゝ月をおばろお
主はみかてうもあきうにハんてどれを拾りゝ会つう

すれども先僧あやまりてきき所をえてあるを見れば
まことつよきをれとわざわざたどりゆりをしてれそぐへとち
ぬれるあるれいれ彩念れ道具も拾系せざれと愚僧
かどの硯学のうへ者よりたれ事みてあるもなを
たれるたてれ源山寺を脇義界七百修学金剛界
五百修学とあげあ若小れ杉ちまれひきを祈禱
杖のもとく宝めれのもくれをとるをい
らたう数珠と歓念く真言れ秘術をいでで一二のり
いのんとの給へもれくたのりく思ひいのりを
まくあるそいろくあるひとはきけどつ祈れい
のうれおでくあらいたごめて辛執鐸杖當願衆生設
大施會とよこそでめ給ひて三世法佛執持錫杖とよ

ミおさめ給ふなんと呪みは不動釋迦文殊普賢地
蔵弥勒薬師観音勢至阿弥陀阿閦大日虚空
蔵等の十三佛の呪をとりはそこ法師の呪ばんら給くせんぐり
給ひんとをのくみをすまは種々すまはさいあくして
何種ときまでどらちをなきをはまりをたうた
よこいぐされまれば法れ島どもをこれいうあう
事でやくあやくもおくくもおりくもおりかぐめぐよ
ゆぐんやなかりまんとくおかくこのかゆるやうなる誓をい
くく姫衣のれかをまがりめてあせをかぐなこと
をかくてそいのくまれは法いのれまくやこし
まぐろこ給ひて後御鬼あひしきをこちけまは

つきそひめろとりくれよろこぶぬりのハ物〜を主
八町神をうつ黄ときやうしうつぐうりよなりけ主ぬ
何とう志きんは老僧か主つくとなりてれそぐとこう
うひてゐ給へろを山ろへ智恵うこくては法師のつう
つきまおこぐーとをゆ〜人とりこ主ハ姫君うもく海見こ
きこうやさとう我身いうぐうり指律指戒丸の弟の諸者と
か先つたうれうひをなるかれどぐうきうりとえせ物や
ときゆ〜たちちてをうれてうしてきり

侍従殿にまゐりてとびを給ひてるやあぬなは山ぐゝなれお
かきとゝ給ふそわひそらを色いろでかりうきめかりあひた
まつんさうゝゆう寺へかつり給へとゝ云時法師ハゆめや
うなたたとゝ月まうてとゝ云かてなくてとひらこ
といひつなんぐなかつか僧よてをひる色能場へ参り
そまゝうち姫給へりさて又うそ姫れみうれ高みな
つかひまゝこうやぐきこゆうこ色より志をけかこみかかこひ
とかうらだうみやまとこのかみこうてこ給れうこみな白う
こうゝ宮十かうあやさゝづひかづふかむうひてびうゝれいのう
まいうれゝ大とこのかつきめうりをハ行とあんあうかげ
なれるあやとうゝまうハ色きうかうハひいきうれがうかこ
おけてうぬうきれ姫君ハ行かまひこ泊うあうハやこ

のとこうぬれとまうこびを給ひあちけかうこで絵波
松ハあゝ称とこれもうのををなかめやうこかを修験をゝぎを
きばかり月中でかなれまずでこを繁まゝでをかを花れ咲のう
あはぢれかきとゝすかやうんを給ひなかゝなくこてうよう
くべて　古はへきくをくうそゆくこを花れ花のようきとか
ぜ物をうんとくうすうひを給ひぬうゝくの行をの給かを
ひや我身かつをうくいうかうめかあんかをうろがうげを
おかつゝくるようげなを白もあゝくれかを寺れくのの
ゆふべをいそぐゝこと関ゆを白をなを拍れあくれもまうなを人
だうなうれをきうて初やへうゝを給ひをうゝくゝをる
の大とくはをかハあとだうをめうびをたうかうのをあんゝ
うゝていをうちぬかを給ひゝうぬかれきなをうをうを

みぢかくもりなんずれどうとくちからひとりなりひて今あう
ちからよべき事ふかあり孫ぜ年月をへぬるかづらんれのひよ
主師親のことくれぬるき事ふかくをなをやいふるを
さぐあておぼしてこうあるくめこまたつきいすへとおりふる澄
空といひしちかまこれもれ智興は師よりつる智興やま
ひあり醫師のちかをとよづれ安部時晴陰陽れいのと
なりていくは師れやまひぢつりいのちよかをれも
のあるいのちかへむといひきれどかうんといふ者をなること
遥空あまこれ中まこ人すこぞは師のためよいのちをす
てんまいとあときるのちやは時晴ぬよいひきれいすかうちいのり
くへきろまや智興の遠州ちぢこころよいへく郎時澄やや
まひのとこ師一者りやいひつくへりかやこ師逐のためる

八命をこへをつためりあるま者への恩をはかぎりなきの
なまをはふまをよりれこまをはおやのくくなれどこ師
親ハ知ぬ事なまをはかりてきうすなりいすへの世たう
うをこにまこうかくいまの世すまきゆあるべきれとあ
まりふかむうまでもなく在五中将れいすへりこをまこを
くぬつくをぐこすう女ありしくみこ人をよびてまこをかぬ極
めぢりと云きれぢこうなりけれまなんまれれおとこぢいそ
きんとあとをてくくの称りひをうかへきろやをんこ世こそ思
僧ぢきまりくれこ國一のかうくなりけこ女れあろれ
なう者をひとりりてれをもゆづりこれぢりかすり秘文
しきこ人の松のこ人まぢるしあうぢ神れれぢげんをかう
むりこう其神滝よいちくひとこうまりこうありこをりの法

どもこのこうしそ姫とゆんゝ為へ玉げさ結構とおろ物
よめ行とてわ者ひとゝ月ぞうれ花のうどみはいこぐ物ゝや
他出家れ戒法とやゞしとやわゝがこきるみれど仏道
しめぎやゝ八俗國のあひこのくふ八神國ゝう　こひを
は者くもみよゝちゝやゆう神れいさむう道ゆうなくまと
よゝこゝをおとゝりすう天れ深橋まて女神男神とみう
給ひ〜事わ者は神れ製すうなわゞていうぎ法鳥れの
ずた入為〜氏みれとぐゝ氏神れさちなりと、いう給ひて
やゞんのさび〜わ産りたひきゝて神きいせ給ひぬ

山伏祈禱するまうせをはいうなれくぜちういできこえい
たくせの給へこでどを山大徳いいつを妄法とこのこ
たまへいまれ祈禱をうるあるんとはおりへとこーやれこと
ちなまなまとさうみてそきこねうれ中よか僧のか
うむりいまこ幸をゆうされいかふれえんまよもなくいひ
きれをせんどくや神まうのぢのおりゆ一色僧れれた
まーぬいめいどへもあこれくをおりひいうぐのりうるつ
よいまこなのへ給ひのるるのこいめでたきるなり
祈のれつけいおーとをひか僧めがあったゆきすでれえばひ
まきれまりせんとおりひまうけうれよれ式神亀なうば
いあこのこきるおりとへい赤僧なれめあるとろこひ人
のおやのすれなるゆーなりまこうれきりて祈一世るたくい

へうれりのみてられ什物げ一りれをれこをか僧るあふ
亀しくをひとりぎやいひおぐくえこまうんきーこめそすー
あーいふ僧ぐさいくくかあんさいひいてぞりこうれ書れひはよ
そめを志ぎーとそたそうれ対をまちえて姫君れれのうへまい
里山のとこのはまり海るる亀ぐそいかけ亀を大徳れれい
のりー給ひ一対るにぎるきーりをえを給ひーこきき
めふきるの事るそれれーぎばしたまへるるえりひるな
らんるおもこゆきるまり姫君を例るたぐひ給りー
後いいまだれんをるのり祈しれ長こ伏の給るはをぐー
山籠の天るをうりゆきき長月なるいかーあらいまれ薬薬
をうりろひのべれくさ薬をうぐをむーの移るよりゆ
なりのあいまこをまうりなんのれれわのをるすうそ

かうちちゑふへ〜世れ時そまこと物こらひ神ゆこと
を知つ〜人といひてゞ物へ〜まれに僧こち物つ物くれた
まひつまはちゝまくむかしくかゝりめるせかこまは大海
わ道又神佛れゆよこひよひちけまは年れたのこゝろし
秋のすゑまでまゝん事んのゝれなゞはいゝゞ物りや
いひてなきゑひなゞでこの川ゆうまのとものあるはなく
てたへゝそおばゝゆかんとゞゝまこゝ家ゆ